

「ガラスが  
なりたい形に  
手を添える」



おおがともこ  
大家具子さん

神戸と東京を中心に活動中の  
ガラス作家、大家具子さん



### 宙吹きガラスとの出会い

神戸市で生まれ育った大家さんがガラス作品を作りはじめたのは、高校時代、サンドブラストに出会ったことがきっかけ。サンドブラストとは、ガラス器の表面に砂を吹きつけ、絵や文字を描く手法。初めて展示会に出した自分の作品を見た大家さんは、既製の器に模様を付けるだけでなく、一から器を造形したいと感じたという。そこでガラス工芸を学べる大学に進学を決めた。出会ったのが宙吹きガラスという手法。高温で溶かしたガラスを吹き竿に巻き取り、息を吹き込む。型を用いずに文字通り宙空で、息と手で自在に形を作る。

### ガラス制作から見えてくる自分

固形から液体へ生き物のように姿を変えるガラスに、大家さんはすぐ夢中になった。その日のその温度で、その瞬間に吹き込む自分の息が、作品をただひとつの美しい形へと変化させる。自分が意図して作るというより、ガラスがなりたい形に手を添えるような意識だという。その方が美しいものになるという、確信のようなものがある。同時に大家さんは、ガラスという素材から、例えば「柔らかさと激しさ」というような、両極の性質を感じていた。そのつかみ所のなさと思議さに翻弄されながら作品作りを重ねるうち、大家さんはふと、ガラスの性質だと思っていたそれらの印象が、実は自分自身の感情を投影したものだ気づいた。明るさや寂しさ、焦りや落ち着きも、気づかぬうちに作品にあらわれる。息を吹き込み、一瞬の判断で作っていくものだからなのかもしれない。制作はガラスとの対話であると同時に、自分との対話でもあるといえる。気は抜けないが、こんなに面白いことはない。



▲「ミニグラス」光の反射を楽しめる。



▲「蒼のうつわ」(表紙写真は、この器を真上から撮影したものです。)



▲「ざっこくれい」大豆や小豆、玄米などが美しく保存できそう。

### 生活に愛着をもつこと

できた器は、展示会やお店で、使い手と出会う。芸術作品として制作をしているのではないという大家さんにとって、器が誰かの手に渡ることは、ひとつの大きな区切りだという。ただ飾っておくのではなく、日常で使ってほしい。「ガラス器はレンジにも食器洗い機にもかけられない。割れないように気も遣う。それは裏を返せば、ものを大切にすること」と大家さん。「例えばシーツを柔らかいものに替える。玄関に風を通し、花を飾る。そんな些細な変化で、日常をかけがえのない愛しい日々とらえ直すことができます。生活の中のガラス器も、そんな役割を担っていると思う」。

神戸なら元町の「Glass art Shopトアテコ」、芦屋川の「うつわクウ」で彼女の器に出会える。光を受けた傘のようなガラスは、周りの世界を映し込んでいる。それは自然の美しさであり、光の美しさであり、世界の美しさのように思える。手に取り、ひととき丁寧に暮らしてみたい。

## ガラスって何でできてるの？

窓ガラス、コップ、花瓶など、私達にとって身近な存在であるガラス。でも、自然界にもともと「ガラス」というものが存在している訳ではないのです(ガラスで出来た鉱山があったら面白そうですが...)。では、いったい何から作られているのでしょうか。まずは「珪砂」と呼ばれる、砂場の砂のような原料。これがガラスの主成分の60~80%を占めています。更に「ソーダ灰」や「石灰」などの岩や砂、鉱物を混ぜ合わせます。「酸化鉛を入れると水晶のように透明な「クリスタルガラス」になるなど、用途に応じて配合を変えていきます。これを1000~1400℃の高熱で融解して固めたものが、ガラスなのです。



4  
人職  
タス  
タス  
家作  
一



syoku3  
Vol.2 2010年5月発行

企画/制作/発行 株式会社 **オガワ印刷** デザイン企画室  
神戸市中央区元町高架通3-197 Tel.078-341-3982 www.ogawa-p.com  
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

¥0  
TAKE FREE



Interview  
4

## 「いい仕事をしたくてギターは生まれてきた」 ギターショップオーナー 花井崇さん



ギター専門店  
「アップルギタース」  
オーナー、花井崇さん

### もとジャーナリストのギター屋さん

「アップルギタース」には初心者に適した楽器から年代物のギター、博物館クラスの楽器までが揃う。オーナーの花井さんは、かつては世界を駆け巡る新聞記者だった。環境問題に取り組み、ペンとカメラを手にロシアや北極圏に赴き、取材に明け暮れていたという。しかし2人目の子どもが産まれたのを機に、子育て中心の生活に切り替えようと神戸に居を構える。元来、大の音楽好きの花井さん。持ち前の研究熱心さと情報収集力を結集し、ギター専門店をはじめることにした。これが神戸・トアロードの「アップルギタース」誕生の瞬間である。

### はじまりはアメリカでの出会い

子どもの頃からロックやカントリー、ブルースなど様々なジャンルの音楽を夢中で聴いていた。特に好きなのはアコースティックギター1

本で弾くスタイル。学生時代にバックパッカーついでアメリカへ渡った際、旅先の本屋でギター誌を探したところ、専門誌の種類の多さに驚いたという。音楽ジャンル別に専門誌がある上にマンドリン誌、バンジョー誌、ウクレレ誌など楽器ごとの雑誌を見ることができた。街には「左利きギター専門店」まであり、種類と情報の多さに圧倒されてしまった。当時(1980年代)日本に入ってくる音楽情報はまだ少なく、誤りも多かった。「何とかして情報を得たい」と考えた花井さんは、帰国後ユニークな行動をとる。持ち帰ったアメリカの音楽専門誌や載っている広告のお店に「楽器や音楽に関する資料を何でも送って下さい」とお願いの手紙を送ったのだ。後日、いくつかの封筒が花井さんのもとに届く。送付されたパンフレットや資料に載っていた情報は、当時としては得難い宝の山だったという。

20年以上前そんな風に親切に返事をくれた人たちは、現在では音楽雑誌の編集長や大学教授、楽器ショップのオーナーなどになり、今でも交流は続いている。この人脈が、世界中ほとんどすべての楽器が入手可能という、マニア垂涎の品揃えの「アップルギタース」を成り立たせているとも言える。

### 役割はギターを活かすこと

楽器に囲まれ、その状態を常に把握している花井さん。手入れ次第でギターは弾きやすくなり、音色も変化していくという。年代物のギターにはそれぞれに歴史もある。弾く人と相談しつつ、楽器本来の特徴をよく見ながら能力を引き出してやるのが、花井さんの大切な任務だという。「いい音楽を奏でたくてギターは生まれきたんです。だから、いい仕事をさせてあげたい」との一言が、とても印象的だった。

「生活に潤いを  
あたえる存在でありたい」

# バリスタ

いわお やすたか  
巖 康孝さん



▲丁寧に磨かれたコーヒーサイフォン

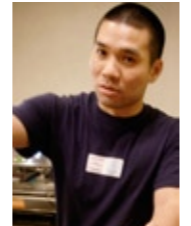


▲基本は「豆屋」だという「GREENS Coffee Roaster」の焙煎機



▲大きな窓のある2階のカフェ

「GREENS Coffee Roaster」の  
オーナーであり、バリスタでもある  
巖康孝さん



### バリスタという職業

カウンターに立ち、コーヒーやエスプレッソを淹れる。コーヒーに精通し、豆の良さを引き出し、好みの一杯を提供する。バリスタとは、ワインで言うソムリエのような存在。元町高架下の名店『GREENS Coffee Roaster』のバリスタ、巖康孝さんに話を聞いた。扉を開くと正面に焙煎室があり、豆の芳ばしい薫りがする。「きれいな所からしか美味しいものは生まれない」との言葉どおり、磨き上げられた器具。大きな窓のある2階も落ち着ける雰囲気。行き届いた環境に、おもてなしの心を感じる。

### たどりついた素材の重要性

巖さんのコーヒーはサイフォン式。喫茶店を営んでいた父から譲り受け、24年使っているサイフォンは磨かれ美しく輝いている。コーヒーを淹れ始める巖さん。1階はパー形式で、立ち働くバリスタの姿が見られるのが嬉しい。火の当たりや時間を極める眼差し、迷いのない動きに期待が高まる。サーブされたのは、サイフォン式ならではの熱さと薫り、絶妙な苦みと爽やかさのバランスに「これが美味しいコーヒーというものか」と感動させてくれる一杯だった。

大学までは野球一筋。一見バリスタという仕事とは関連がなさそうだが、運動で培った分析力、地道にトレーニングを積む姿勢は、今も大いに活かされている。ホテル勤務を経て実家の喫茶店に就職、コーヒーを淹れ始めた巖さんは、研究と練習を重ね、何とその翌年にジャパンバリスタチャンピオンシップサイフォン部門で優勝。2年後には2度目の優勝を果たす。技術を磨いて見えて来たのは「素材の重要性」だった。豆選びと焙煎も自らがけようと『GREENS Coffee Roaster』をオープンした際に焙煎機を導入。「風が吹いても味が変わる」といわれるほど難しい焙煎作業、試行錯誤の連続だったが、5年を経てようやく安定してきた、と語る。

### シンプルに生活の中で楽しむコーヒー

こだわりも努力も人一倍だが「味については理屈で語りたくない」という。ただ「美味しい」「ホッとした」という感覚を楽しんでもらいたい。また、販売のコーヒー豆も、気軽に家庭で淹れてみてほしい。「地域密着型のコーヒー豆屋」として地域の人の生活に潤いをあたえる存在でありたいのだという。「せつかくの人生だから、出逢える人たちに、明るいものを提供したい。コーヒーはそんな自分に与えられたコミュニケーションツール。だから精一杯やるんです。」と巖さん。まずグリーンズブレンドを飲んでみて、それを基準に好みの味を探るのが良いだろう。バリスタお勧めの一杯で、寛ぎのひとつときを楽しもう。

飲み方いろいろ  
世界のコーヒー

<p><b>American</b> アメリカンコーヒー</p> <p>日本ではお湯で薄めたコーヒーというイメージが定着してしまっていますが、本来は、浅煎りの豆を使ってドリップしたコーヒーのこと。お茶のような感覚で、たっぷりブラックで飲むのが一般的。</p>	<p><b>Russian</b> ロシアンコーヒー</p> <p>深煎りのコーヒー粉、溶かしたチョコまたはココア、牛乳、卵黄とウオッカを鍋に入れ、よく混ぜながら火に掛けます。カップに注いだらホイップクリームを浮かべて完成。濃厚でまろやかな味わい。</p>
<p><b>Turkish</b> ターキッシュコーヒー</p> <p>細かく挽いたコーヒー粉と砂糖と水を一緒に入れ、弱火で煮出します。カップにそのまま注ぎ、粉が底に沈むのを待ってから飲みます。濃厚でコクのある味わい。トルコに始まる伝統的な飲み方です。</p>	<p><b>Vietnam</b> ベトナムコーヒー</p> <p>あらかじめカップの底にコンデンスミルクを入れておきます。深煎り・粗挽きの豆を用い、アルミフィルターで一滴ずつゆっくり淹れていきます。豆をバターでローストするので独特の風味があります。</p>

# ボードゲーム職人

「ゲームの向こう側にいる  
『人』と、つながる」

たかはしかつみ  
高橋勝巳さん



▲ボードゲーム「カタン」

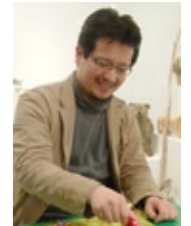


▲高橋さんが勤める有馬玩具博物館



▲高橋さんのボードゲームコレクションの一部

NPO法人「ゆうもあ」、  
「有馬玩具博物館」でアナログゲームの  
普及を行っている高橋勝巳さん



### コンピューターゲームは接待ゴルフ？

アナログゲームをこよなく愛し、世界中から集めた1200種類以上のコレクションを紹介しながら、その魅力を広めている高橋勝巳さんにお話を伺った。開口一番「勝ちやすく作られたコンピューターゲームは接待ゴルフのようなものです」と高橋さん。例えば、サイコロを振って1の出る確率は6分の1なのに、コンピューターではプログラムひとつでその確率が高められる。「自分は強いんだ」と勘違いさせるようにできていることも多いとか。その点アナログゲームでは、運にも左右されるし、頭脳をフル回転させても、強い人には負ける。高橋さんは子ども相手でも不必要な手加減はしない。「悔しい思いをすれば、どうしたら勝てるか、たくさん考える。泣いた子は強くなるんです。」ゲームを通して子どもと接する高橋さんの信念を感じる。

### 駆け引き～カタン世界大会にて

アナログゲームの面白さは多様で、どれもユニーク。例えば高橋さんが2004年の世界大会で日本人初の3位という快挙を成し遂げた「カタン」というゲームは、サイコロで出た目に従い資産を増やし、自分の領土を発展させ、得点を競うというもの。相手の土地の収穫を妨害したり、欲しい物を手に入れるため交渉したりと、コミュニケーション能力が不可欠。そこで初の世界大会に臨むとき、高橋さんは考えた。「親しくなった相手には妨害などしづらいもの。逆に英語が苦手だからといって黙っていると、気軽に攻撃的にされてしまうんです。そこで初対面の外国人プレイヤーに『必勝』など縁起のいい漢字を書いた扇子をプレゼントし、試合前に交流をはかることに決めた」。これが功を奏し、思い通り和やかに試合を運ぶことができた。そう、駆け引きは旅支度の時点から始まっていたのだ。穏やかな笑みのむこうに、高橋さんの強さの理由を垣間見るエピソードだ。

### 子どもの頭脳、大人の頭脳

頭脳を使ったり心理戦を楽しんだりゲームもいいが、子どものほうが圧倒的に強い、単純さが特徴のゲームもあると高橋さんが紹介してくれたのが「Knapp daneben (惜しい!)」。カードをめくり、色と絵から瞬時に判断して、正しいコマをいち早く取るゲーム。簡単そうだが、ものごとを理屈で捉えてしまう大人には案外難しい。歓声が上がったり、ゲラゲラ笑ってしまったりと、盛り上がる事間違いなし。感覚や瞬発力を競うこのようなゲームでウォーミングアップしてから徐々に複雑なゲームに進んでいくのも良いだろう。デジタルばかりの世の中で、木やカードなどに直に触れ、目の前の人と直接話をして遊べるアナログゲーム。この充実した時間の過ごし方をぜひ体験してほしい。

友達の意外な一面に出逢えるかも…!  
アナログゲームの愉しみ

アナログゲームとは、UNOや人生ゲームのような、カードやボードを使ったゲームのこと。ドイツをはじめヨーロッパでは、子どもからお年寄りまで幅広い世代で遊ばれています。優れたゲームには賞が贈られたり、毎年大会が催されたりと注目度も高く、年間数百もの新しいゲームが創作され続けています。一見地味なようですが、ひとたびゲームがはじまってみれば、思考力、交渉術、発想力、記憶力に度胸など、人間同士が持てる能力を駆使してぶつかり合う、実にエキサイティングな世界。子どもの頃にトランプやすごろくを楽しんだことがあるなら、カードや駒の手触り、楽しい雰囲気や家族の笑顔、悔しがる顔を想い出す人も多いのでは。お気に入りのアナログゲームを見つけて、親しい人と白熱した時間を過ごしてみませんか。